

西アフリカの農業の起源と考古学の現状

著者	竹沢 尚一郎
権利	Copyrights 日本貿易振興機構（ジェトロ）アジア 経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) http://www.ide.go.jp
雑誌名	アフリカレポート
発行年	2000-09
出版者	日本貿易振興会アジア経済研究所
URL	http://hdl.handle.net/2344/00008350

西アフリカの

農業の起源と考古学の現状

竹沢尚一郎

はじめに

パンアフリカ先史学会議

マリの友人から手紙が届いた。内容は、2001年2月7日から12日まで、「パンアフリカ先史学大会」をマリの首都バマコで開催するというものである。この会議は11回目を迎え、今回は15のセッションからなっている。

そのセッションの内容をみると、「人類の進化」「アフリカの先史環境と人口」「アフリカの石器時代」「アフリカの食料生産」「アフリカにおける金属の発展」といった先史学・考古学のテーマとともに、「複雑性の発達」「歴史考古学」「民族考古学」など、アフリカ史を広い視点からとらえようとする国際会議であることがわかる。しかもこの会議にあわせて、世界遺産に登録されているトンブクツーやジェンネ、ガオなどの考古学遺跡のほか、有名なドゴン等を訪れるツアーも計画されているという。関心のある方は、本文の末尾にある連絡先に問い合わせははかがか。

この手紙を送ってくれたのは、マリの考古学者であり、文化省の芸術文化局長をつとめるテレバ・トゴラ博士である。かれはまた私たちの研究プロ

ジェクトの共同研究者でもある。私たちのプロジェクトは、西アフリカ原産の稲オリザ・グラベリマ (*Oryza glaberrima*) の起源地と栽培開始時期を特定することを目的に、1999年度から始まった。このプロジェクトの紹介もかねて、農業の起源を中心に西アフリカの考古学の現状を要約したい。

1 西アフリカの農業の起源

西アフリカの農業の起源に関する関心は、かなり古くから存在した。イギリスでは、エジプトで開始された農業が西アフリカに伝えられたとする伝播論が長く主流であったのに対し、すぐれた農学者であるシュヴァリエ (A. Chevalier) をもったフランスでは、1930年代からサハラでの独立起源が主張されていた。これをさらに前進させたのがポルテール (R. Portères) であり、かれはグラベリマ稲をはじめ、トージンビエ、ソルガム、フォニオ、テフ等、アフリカで栽培されている主要な作物の品種と野生種の分布を丹念に図表化することで、これらの作物のアフリカ起源を裏づけたのである。

1959年に出版されたマードックの『アフリカ』によれば、サハラ以南の熱帯アフリカには、独自

に栽培化された作物が250種以上存在する。それは、主食となるグラベリマ稲、トージンビエ、ソルガム、フォニオ、テフのほかに、ササゲやアースナッツなどのマメ類、オクラやヒョウタンなどの果菜類、ゴマや油ヤシ、カリテなどの油料植物など、栄養学の観点からみても完成した作物体系であった。しかも熱帯アフリカでは、地中海地域で栽培化された小麦、大麦などの作物を受け取っていないことから、エジプトからこれらの作物が伝えられる以前に、熱帯アフリカで独自の農業が開始されていたと判断されている。エジプトにおける農業の開始をBP7000年 (BPはBefore Present) におくなら、それ以前に熱帯アフリカでも農業が開始されていたというのが、今日の定説である。

ところが問題は、以上の見解とアフリカにおける考古学の成果とのあいだの大きなズレである。人類の起源がアフリカにあったことはすでに常識になっており、わが国を含めた多くの研究者によって、人類の起源史が日々明らかにされつつある。ところが、それよりはるかに現代に近いアフリカの農業の起源は、いまだに多くの謎に包まれている。これまでに発見された熱帯アフリカの最古の作物は、モーリタニアのダール・ティシット (Dhar Tichitt) 遺跡のトージンビエのBP3200年であり、土器の上に残されたトージンビエの条痕でもBP3500年にすぎない。グラベリマ稲にいたっては、もっとも古いものでもBP1800年程度でしかなく、先のマードックの推定年代とはあまりに差がありすぎる。

熱帯アフリカの農業起源の研究が進展していないのは、いくつかの理由による。ひとつは、熱帯のアフリカでは作物が残りにくいいため、炭化しないうちの種子が残らないことである。しかしそれ以上に大きな理由は、研究者の数が絶対的に不足していることである。西アフリカの考古学の現状

がいかなるものであるかを、マリを中心にみていきたい。

2 西アフリカの考古学の現状

マリは日本の4倍の面積をもつが、この国を専門とする考古学者は世界中でも十指に満たない (そうした事情は、ナショナルな研究者が多く存在するナイジェリアをのぞけば、どの国も似通ったものである)。数少ない研究者ではあるが、そのなかから西アフリカの歴史認識を根底からくつがえした研究もあらわれている。マッキントッシュ夫妻によるジェノ遺跡の発掘である。

古都ジェンネ市南東には大きな遺跡が存在することが、伝承や表土の状態から知られていた。しかしこのジェノ遺跡がはじめて発掘されたのは1978年であり、それ以降も継続しておこなわれた調査によって以下のことが明らかにされている。ジェノ遺跡の成立は西暦紀元前後であり、その頃から鉄とグラベリマ米が出土している。さらにAD400年頃には、人口1万を数える現在のジェンネと同じ広がりをもつ都市が成立しており、その周囲には、鍛冶、漁、米作、金属細工などに特化した小集落が建設されていた。しかも、長距離交易の存在を裏づける銅、ガラス、ビーズ、金などの製品も出土しており、この時期のジェノが多数の人口をもち、職業分化と長距離交易の存在を前提にした、きわめて発達した都市を形成していたことが明らかにされた。しかしその後ジェノはAD1200年ごろから城壁都市に移行し、やがて放棄されて都市機能はジェンネに移ったのである。

この発掘の最大の成果は、今から1600年前というきわめて早い時期に、1万ほどの人口をもつ都市の成立を確認したことである。しかもその都市は、人口規模だけでなく、長距離交易と職業分化

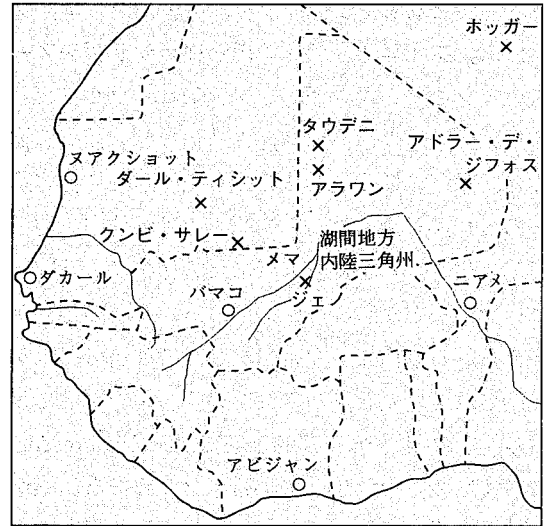
という3点セットを備えた都市であり、この段階に国家と呼ぶべき社会組織を成立させていた可能性はきわめて高い。停滞的と形容されがちな熱帯アフリカのイメージを、マッキントッシュ夫妻の研究は完全に裏切ってみせたのである。

かれらの発掘の舞台は「ニジェール川内陸三角州」と呼ばれる低地であり、上流の雨がこの地にいたる9～12月には氾濫水で覆われて、幅100キロメートル長さ150キロメートルの巨大な氾濫域を形成する。この氾濫原の南東に位置するジェンネは、250キロメートル北のトンプクツと双子都市を形成して、13～15世紀のマリ帝国、15～16世紀のガオ帝国と続いた西アフリカの大帝国の時代を支えてきた。10世紀以降の西アフリカの歴史は、中世のアラビア語史料や17世紀のトンプクツの歴史書等で再構成することができるが、それ以前については伝承や神話の領域に属していた。それがかれらの発掘によって、生き生きと再現されたのである。

ただ、マッキントッシュ夫妻はジェノを中心にかなり広い範囲で発掘をおこなったが、いまだに西暦紀元以前の遺跡には遭遇していない。その理由は、現在より湿潤であった過去には、内陸三角州は一年中水に覆われ、人間の居住が可能ではなかったためである。とすれば、この内陸三角州の周囲の土地にこそ、より古い遺跡が存在するはずであろう。そうした観点から、1980年以降マリ・チームおよびフランス・チームの手で広域調査が進められたことにより、多くのことがわかってきた。その成果や、モーリタニアやサハラ発掘をもとに、サハラ砂漠およびニジェール川内陸三角州の先史時代を再現しよう。

サハラ砂漠中央部のホッガー (Hoggar) やアハガール (Ahaggar) では、BP1万年頃から人間の居住が始まったが、サハラの乾燥化にともない

西アフリカの考古学地図



X 主要遺跡 O 主要都市

BP6000年頃南下し、タウデニ地区やアラワン地区に移動した。かれらはおそらく狩猟と漁で暮らしていたが、BP4000年頃にはここも乾燥化が進行して、さらに南部のメマ地方や湖間地方に移動した。その後まもなく、牧畜民の移動により牧畜が開始され、おなじ頃には農業も開始された。サハラの南縁地域に鉄や銅が出土するのはBP3000年からであり、こうした技術と社会の発展によって、ジェノ遺跡にみられるような都市および国家の形成につながったのであろう。

3 アフリカ稲の起源を求めて

アフリカ稲の起源の特定をめざす私たちの研究は、上記の理由から、内陸三角州の北西のメマ地区で調査を開始した。調査チームは、考古学、作物学、形質人類学、アフリカ史を専門にするメンバーからなり、新石器および鉄器時代の遺跡の広域調査をすると同時に、3カ所で発掘調査をおこなった。これまでにわかったことを報告したい。

第1に特記すべきは遺跡の数の多さである。メマは現在では準乾燥地に属するが、過去にはニジェール川の支流が流れていたことは、粘土質の土壌からも明らかである。メマは50km×80km程度の土地であり、北部には新石器時代の、南部には鉄器時代の遺跡が数百の単位で存在する。とくに鉄器時代のものは規模が大きく、直径が1キロメートルを超えるものもめずらしくない。過去にいかん人口の集中があったかを示すものである。

第2に注目されるのは溶鉱炉の跡である。ひとつの遺跡に150以上の溶鉱炉跡が残るところもあり、全体では1000を超える数の溶鉱炉が存在すると思われる。溶鉱炉は一般に幅70センチ、長さ150センチ程度の大きさであり、2メートル程度の高さの炉を粘土で作り、なかに木炭と鉄鉱石を重ねて燃やして鉄を溶かしたとすれば、ひとつの溶鉱炉で数トンの鉄が作られた計算になる。メマの土地が、西アフリカの製鉄業の中心地であったのはうたがいない。

第3は、数種類の紡錘の存在である。西アフリカで現在も用いられる紡錘は直径3センチ程度の円錐形のものであるが、これまでに見つかったことのない、土器の底面を削って作った直径7センチ程度の平たい紡錘が私たちによって確認された。年代の特定はできていないが、形状、製造方法等において現在につながる紡錘とは異なることから、後者とは異なるルートで伝播ないし創造されたと推測される。この紡錘は新石器時代の遺跡で発見されており、西アフリカの布の生産が従来より大きく遡る可能性はある。

第4に、私たちの目的であるアフリカ稲の栽培については、まだ多くのことはわかっていない。新石器時代の遺跡を発掘したことにより、食事の跡が数多く発見されたが、まだ炭化米は確認されていない。出土した多くのカーボンはDNA分析

にまわされている。

以上のことを踏まえ、今後の見通しを述べておきたい。メマ地区は、7世紀頃から11世紀にかけて発展したガーナ帝国のすぐ東部に位置する土地であり、ガーナの建国神話は、ガーナが鉄器の使用により隣接諸社会に優越したと語る。おそらくメマは、ガーナ帝国の兵器と農具の主生産地だったのであり、それにより西アフリカ最古の帝国を支えていたのであろう。また、私たちが考えているように、布の生産が従来より遡るとすれば、この土地で鉄と布の生産がセットになった可能性はある。

ガーナ帝国は乾燥化によって11世紀頃に崩壊し、その後、帝国の支配者であったソニンケ人は各地に散ることで(ジュラ、マルカ、ジャカンケ、ヤルシなどと呼ばれながら)、西アフリカ全体の交易を支配した。かれらが各地に鉄と布を伝え、それを主たる交易品として活用していたことを考えるなら、これらの製品の研究は私たちに西アフリカ史のより深い理解をもたらすはずである。それらの製造時期を特定すること、およびその総生産量を推計することは、私たちの課題のひとつである。

グラベリマ稲についていえば、この稲はニジェール川中流域を核として、セネガル南部、ギニア、ギニアビサウ、コートジボワールなど、かなり広い範囲で現在も生産されている。栽培開始時期と栽培地が特定できたなら、これらの稲作民の移動をあとづけることが可能になるかもしれない。これも今後の課題である。

【付記】 アフリカ先史学会議の連絡先は下記のとおりです。

Dr Tereba TOGOLA,
Direction Nationale des Arts et de la Culture,
BP91, Bamako, Mali, tel. 223-22-33-82, fax. 21-67-86.

(たけざわ・しょういちろう/九州大学大学院
人間環境学研究所)